

赤旗記者「特別募集」

特集
すいよう

しんぶん赤旗を
あなたと一緒に
つくりませんか



国民の目線で取材、紙面づくり

赤旗編集局には23の部署があります。

■政治部	■地方部	■校閲部
■社会部	■党活動部	■整理部
■国民運動部	■学術・文化部	■工程管理・開発部
■外信部	■くらし家庭部	■電子版室
■論説委員会	■テレビ・ラジオ部	■総務部
■特報チーム	■囲碁将棋行楽部	■広告部
■経済部	■写真部	■日曜版編集部
■スポーツ部	■読者室	

未来切り開く報道

あなたの手で



▲赤旗記者「特別募集」特設サイトはこちらから

「新聞の危機」「ジャーナリズムの衰退」が言われるなか、日本共産党が発行する「しんぶん赤旗」が元気で、権力の監視と真実の報道を貫き、「戦争の準備ではなく平和の準備を」と理性の論陣を張る、世界と日本の草の根のたたかいを伝える—こんなかけがえない役割をはたしているのが「赤旗」です。

引き続き、もっと大きな役割をはたしていきたい、多彩で役に立ち、ためになる、勇気を運ぶ紙面づくりにつとめたい。そのために赤旗編集局はいま、編集局で働く仲間を大募集中です。政治を変え、社会を変え、未来をつくる—記者たちの思いと編集局の一端を紹介します。



たたかう世界中に

ワシントン特派員
2019年入局

石黒みずほ

「世界中どこに行っても、たたかう人たちが必ずいる。その人たちの声を届ける記者にならなければならぬ。先陣記者の言葉を胸に、米国内で日々取材に取り組んでいます。ストライキへの支持を呼びかける署名を集めていた活動家は「私たちはみな労働者。一人ひとりの経験に結び付けた対話を続けていくことが大切だ」と語りました。特派員は、自主的な判断が求められたり、勇気を振り絞って現場に飛び込むこともあって大変です。でも、変革を求め、あきらめずたたかう人々の姿を、記事を通じて伝えることができる。特派員として何よりのやりがいです。」

読者の命救うことも



日曜版編集部
2003年入局

藤川 良太

「これでゆめつくり休める。ホッとした。その夜、病室のベッドで重度の結核を患う夫は妻に言いました。社会保障制度を詳しく解説する日曜版の人気連載「お役立ちトク報」の記事の二コマです。夫婦は病気で仕事を失いながら神奈川県内のアパートを追われ、路上生活に。持ち出した荷物の中に親族からの手紙があり、無料低額診療制度を特集した「お役立ちトク報」が同封されていました。最後に頼ったのが同制度で、命すら危なかった夫婦を助けた。記事を書いてよかったと心底思いました。」



小さな声をつなげて

社会部
2021年入局

小林 圭子

前職は保育士をしていました。「子どもたちが笑顔で、安心して成長できる環境をつくりたい」とその思いは、記者になった今も変わらない大きな柱になっています。所属する社会部では、教育や社会福祉、災害や原発問題など幅広い分野を取材します。現場に足を運び、当事者の生の声を聞く。個々の問題はさまざまでも、原因の根っこはつながっていると改めて実感します。赤旗記者の魅力は、草の根で頑張る人たちに寄り添い、権力が消されてしまいうる小さな声を、すくい上げていくことだと感じます。子どもたちが安心して暮らせる社会、誰もが安心して暮らせる社会であるはず。報道には「社会をよくしたい」という一人ひとりの思いをつなげ、大きな動きに変えていく力があると信じています。次の世代により良い未来を渡せるように一緒にがんばりましょう！」